

## 中世プロヴァンス語における 二つの条件法について

和田 愛子

中世プロヴァンス語には二つの違った形の条件法が存在した。一つは通常、動詞の不定詞と動詞《aver》(avoir) の語幹 av- を取り去った半過去形を結合して形作られる。これをいま条件法Ⅰと名付けよう。もう一つはラテン語の直説法大過去形に由来するものである。これを条件法Ⅱとしよう。ラテン語の直説法大過去形は、北部のフランス語では最古のテキストの中にその跡を幾つか留めているだけで早く消滅した。南部のプロヴァンス語でも直説法大過去の意味で存在したのは、《Girard de Roussillon》のような幾つかの古いテキストを除けば、ごく初期の間だけだった。しかしながら、プロヴァンス語では形自体はフランス語のように消えてしまうことはなかった。すなわち、直説法大過去としてではなく条件法Ⅱとして残ったのである。従って、中世プロヴァンス語では、条件法ⅠとⅡの二種類の条件法が、Ⅱは条件法現在の意味以外にさらに条件法過去の意味を持っていたが、共存していたのである。そして、中世の末期頃からⅠがⅡに取って代わる傾向があり、現在に至ってはⅡは完全に消滅し、フランス語の場合と同じくⅠだけが用いられている。

(1) J. Anglade: Grammaire de l'Ancien Provençal, p. 261, p. 276.

Edouard Bourciez: Eléments de linguistique romane, p. 344.

(2) H. Lafont: Grammaire occitane p. 246.

条件法を含む型の仮定体系については、主要な二つの型がある。すなわち、「si+直説法半過去形…条件法Ⅰ」と「si+接続法半過去形…条件法Ⅱ」である。前者の条件法Ⅰの型は他所から移入されたものではなく、フランス南部地方で独自に生まれたものと考えられている。というのは固定化した文型の状態で1100年頃にすでにプロヴァンス語に存在していたからである。<sup>(3)</sup>条件法Ⅱの後者の型はラテン語の《si habuissem dederam》に由来するもので、最初過去に関する仮定文に用いられていたが、発展して文献以前の時期にすでに現在及び未来に関する仮定文にも用いられるようになっていた。そしてこの型元来の過去に関する仮定を表現する用法は中世プロヴァンス語でのこの型の主要な存在理由となっているが、それは当時現在や未来に関する仮定を表現する型には恵まれていたが、過去に関するものは数少なかったからである。<sup>(4)</sup>

ところで、中世プロヴァンス語においてこれら二つの条件法ⅠとⅡが共存し、ともに用いられているが、このⅠとⅡの間には用法上の相違があったのだろうか。現在までのところ、この問題に対し明確な解答を出した学者は一人もいない。たとえば J. Anglade, E. Bourciez, Lafont などの著書を見てもこの問題にはほとんど触れられていない。<sup>(5)</sup>本稿の目的はフラメンカのテキストを検討することによってこの用法上の相違を探ることにある。

フラメンカは G. Millardet によると密度が濃くよく響く純粹のプロヴァンス語で書かれた中世南部の代表的物語詩である。さらに、A.-J. Henrichsen によれば、この作品は八音綴詩句の韻文であるが、技巧に走り過ぎることなく、

(3) A.-J. Henrichsen: Les phrases hypothétiques en ancien occitan, p. 100, p. 150.

(4) *ibid.*, pp. 149-52.

(5) *ibid.*, p. 104, 《Jusqu'à ce jour, les linguistes n'ont pas tiré au clair la différence d'emploi entre les deux conditionnels de l'ancien occitan.》

H. Lafont: Grammaire occitane, p. 243: 《Il a été senti comme un véritable conditionnel équivalent pur et simple de vendriá.》

E. Bourciez, *Éléments de linguistique romane*, pp. 225, 343, 378, 392-3.

丁寧な散文とそれほど違わない性格の韻文であり、また対話箇所は多少とも高尚な文体の話し言葉を表わしているにちがいないという評価がされている。従って、フラメンカは我々の研究対象としての必要条件を備えた作品であると考えられる。この写本は 8095 行の詩句からなり最初と最後の部分が欠けているので、題名、結末、作者、制作年が判らない。Alfred Jeanroy によると、Rouergue の地で 1240～50 年頃博学で文学に秀でた修道僧によって書かれたよ<sup>(6)</sup>うである。

資料抽出法はテキストに見られる条件法形動詞を全部抜き出すという方法を、分類法は次の三部分、すなわち対話部分、地の文の部分、登場人物の独白・考察部分に分けるという方法を取ることにした。対話部分には愛の女神や神と登場人物との対話や夢の中での対話なども含まれる。そして地の文の部分については、視点の違いによってさらに二つの部分に分けることにした。たとえば、

例 1 Daus l'autra part al[s] servent[z] signa

Aporton aiga per lavar,

(6) 物語の粗筋は次のようである。

Bourbon の領主であるアルジャンボーは、Gui de Nemours 伯爵の娘フラメンカを妻に迎える。Bourbon で開かれた結婚披露宴にはフランス国王も女王を伴ってやって来る。女王はフラメンカの比類なき美しさに夫である国王がフラメンカを本心で愛しているのではないかと疑う。彼女はアルジャンボーに嫉妬心を焚きつけ、彼は嫉妬に苛まれることになる。フラメンカは二人の少女とともに塔に閉じ込められてしまう。やがて、一人の若く美しい騎士 Guillaume de Nevers が彼女の噂を耳にし、恋に陥る。そして彼女に仕えようと Bourbon までやって来るが、教会で彼女を覗き見るだけで、夫の監視がきびしく彼女に近づけない。そこで、ギョームは手段として修道僧になり、彼女が詩篇集に接吻する間に、二語囁きかけることに成功する。何回かの後に、彼はやっと秘かに作らせた地下道を案内して、彼女が侍女とともにやって来る風呂場から彼女を自分の部屋に導くことができる。彼らはこのようにして密会を重ねる。やがてアルジャンボーが嫉妬から解放されて正常に戻ると、フラメンカはギョームに Bourbon を去って、立派な騎士になるように勧める。再会を約束して、二人の恋人達は涙ながらに別れる。その後、ギョームは騎士達の中でも一番強く立派な騎士となってアルジャンボーが開催した騎馬試合に現われる。恋人達はそこで再会する。

Car el si volría disnar,

(v. 1056-8) (現代語訳：Mais de l'autre, il fait signe aux serveurs d'apporter l'eau pour se laver les mains, car il voudrait dîner.)

例2 Guillems ha ben vist e notat

S'om pogr'aver un mot parlat,

(v. 3197-8) (現代語訳：Guillaume a bien regardé et noté dans son esprit, si on aurait le temps de dire un mot,)

において、例1の条件法Ⅰ形動詞《volría》は作者の不確定な気持ちを表現し、そこに登場人物の主観を見出すことはできない。いわば、これは作者の視点で事態を眺めているわけである。例2では条件法Ⅱ形動詞《pogr'》を含む si に導かれた節は、作者ではなくギヨームの考えが描写されているわけである。

## I

テキストに見られる条件法形動詞例全てについて、まず二つの条件法がどこに現われているかを調べ、次にその現われ方の特徴をよく捉えるために分類表を作成しよう。

### 1) 条件法ⅠとⅡが現われる文型

これは仮定体系の主節と条件節のない文中の二つに分類することができる。仮定体系の主節については、たとえば、

例1 「si + 直説法半過去形…条件法Ⅰ」

E cel que non sap molt volría

Ancar apenre si podía.

(v. 4831-2) (対話部分)

(訳：Celui qui ne sait pas grand'chose voudrait apprendre encore,

s'il pouvait.)

例2 「si+直説法現在形…条件法Ⅰ」

Si nom posc guardar una domna,

Mal levaría la colonna

Qu'es de lonc San Peire de Roma,

(v. 1095-7) (登場人物の独白・考察部分)

(訳: Si je ne puis garder une dame, je soulèverais mal la colonne qui est (couchée) auprès de Saint-Pierre de Rome;)

例3 「si+接続法半過去形…条件法Ⅱ」

Ja negun tems il non amera

Si Amors, per son jausimen,

No-il o mostres privadamen,

(v. 1410-2) (作者の視点による地の文の部分)

(訳: Jamais elle n'aurait aimé si Amour, pour la réjouir, ne le lui avait enseigné en secret.)

例4 「qui+直説法現在形…条件法Ⅰ」

Quar ferre freg deuría fendre

Dousor de preg, qui-l vol entendre.

(v. 2901-2) (対話部分)

(訳: Douceur qui supplie devrait fendre même le fer froid, si l'on veut l'entendre.)

例5 「接続法半過去形…条件法Ⅱ」

Be-m fora melz esclava fos,

Ab Erminis o ab Grifos,

En Corsega o en Sardeina,

(v. 4169-71) (登場人物の独白・考察部分)

(訳: Mieux vaudrait pour moi être esclave parmi les Arméniens  
ou les Grecs, en Corse ou en Sardaigne,)

例 6 「si+直説法現在形+直説法半過去形…条件法 I」

Mais si de cor ben non l'amas

E nostre conseil seguias

No-us estaría ges trop ben.

(v. 5259-61) (対話部分)

(訳: Si, ne l'aimant pas d'un coeur sincère, vous suiviez notre  
conseil, ce ne serait pas trop bien de votre part.)

において、例(1, 2, 3)は「si+動詞…条件法」という型の假定体系に属している。例4の場合、条件は関係代名詞「qui」に続く関係節が示している。例5では、条件は「si」を挿入することなしに節をただ並べるだけで、つまり並列で表わされている。これらの場合は「si」に導かれる假定体系と非常に密接な関係にあるので、実は6例しかない<sup>(7)</sup>のであるが、便宜上同一とみなして分類してよいであろう。

例6においては、条件節を構成する二つの動詞が時制上異なっている。すなわち v. 5259 の動詞《amas》は直説法現在形で、もう一方の《seguias》は直説法半過去形である。しかし、ここの二つの動詞の時制の相違は、意味の差違を表現するためではなく、単に韻を踏むためだと考えられる。従って、この例を「si+直説法現在形…条件法 I」よりは頻度数の多い「si+直説法半過去形…条件法 I」に分類した。なお以上のほかに単純形の動詞と複合形の動詞とを同時に含んだ二つの例がある。ここでの複合形の役割は単純形の行動よりも先

(7) A.-J. Henrichsen: Les phrases hypothétiques en ancien occitan, p. 60.

に起こったことを示す先行性の表現と思われる。さらに一つ特殊な例がある。それは「si」に導かれた条件節が二つ存在し、二つの条件節の動詞が法上異なっている例である。文脈から、最初の条件節を話者がより鄭重な気持ちを表現するために、言い直していると考えられる。以上のように、押韻上の理由や、行為の先行性を表わすためや、また敬語的表現などの理由から時制や法の異なる二つ以上の動詞で構成されている条件節を持つ例は、全体から見ればごく少数なので、統計上数が多い型にそれぞれ分類しても問題はないであろう。ただし、図Aと図Bの分類表ではこのような変種型は全体数の中にそれが占める数を（ ）内に示してある。

次に、条件節のない文中については、たとえば、

例7 (条件法Ⅰ)

Anas vos en, ques eu o vueil,

Car ges aissi con far o sueil

Sai a vos venir nom poiría ;

(v. 6781-3) (対話部分)

(訳：Allez-vous-en, je l'exige. Je ne pourrais plus, en effet, venir ici comme d'habitude:)

例8 (条件法Ⅱ)

Ni l'autra carn ja mens non valgra.

(v. 400) (作者の視点による地の文の部分)

(訳：Le reste de la viande ne saurait être estimé de moindre qualité.)

例9 (条件法Ⅰ)

Car qui non fes can far poiría

Ja non fara quan far volría.

(v. 5239-40) (対話部分)

(訳 : car qui n'a pas fait quand il pourrait, ne fera pas quand il voudrait.)

例10 (条件法Ⅱ)

Car non fora quan [il] mi vira

Morir d'angoissa davan se,

Que non n'agues calque merce.

(v. 2746-8) (対話部分)

(訳 : Car il ne serait pas possible, quand elle me verrait mourir d'angoisse devant elle, qu'elle n'eût pas quelque pitié de moi.)

において、例 (7, 8) は主文の中に位置している条件法ⅠとⅡの例で、例 (9, 10) は従節の中に位置している例である。このように、二つの条件法は両方と

図A : 条件法Ⅰの頻度数

| 部 分                        | 対 話   | 登場人物の<br>独白・考察 | 地 の 文      |               | 文 型 別<br>合 計   |
|----------------------------|-------|----------------|------------|---------------|----------------|
|                            |       |                | 作者の<br>視 点 | 登場人物<br>の 視 点 |                |
| Si + 接続法半過去形…条件法Ⅰ          |       |                | 2          |               | 2              |
| Si + 直説法半過去形…条件法Ⅰ<br>(複合形) | 1     |                |            |               | 1              |
| Si + 直説法大過去形…条件法Ⅰ          |       | 1              |            |               | 1              |
| Si + 直説法現在形…条件法Ⅰ           | 3(1)  | 2              |            |               | 5(1)           |
| Si + 直説法半過去形…条件法Ⅰ          | 24(1) | 2              | 1          | 5             | 32(1)          |
| 条件法Ⅰ                       | 38    | 8              | 6          | 7             | 59             |
| 条件法Ⅰ(複合形)                  | 1     | 1              |            | 2             | 4              |
| 部分別頻度数の合計                  | 67    | 14             | 9          | 14            | 104(2)<br>(総計) |
|                            |       |                | 23         |               |                |
| %                          | 64.4% | 13.5%          | 22.1%      |               | 100%           |



も主文にも従節にも現われるのである。

## 2) 統計表

図A（条件法Ⅰ）と図B（条件法Ⅱ）は資料を対話と登場人物の独白・考察と地の文の区分と文型別に分類した表である。

図B：条件法Ⅱの頻度数

| 部 分                        | 対 話   | 登場人物の<br>独白・考察 | 地 の 文      |               | 文 型 別<br>合 計   |
|----------------------------|-------|----------------|------------|---------------|----------------|
|                            |       |                | 作者の<br>視 点 | 登場人物<br>の 視 点 |                |
| Si + 接続法半過去形…条件法Ⅱ          | 15(1) | 7(2)           | 41(3)      | 0             | 63(6)          |
| Si + 接続法半過去形…条件法Ⅱ<br>(複合形) | 4     | 1              |            |               | 5              |
| Si + 接続法大過去形…条件法Ⅱ          | 3(1)  | 2              | 2          |               | 7(1)           |
| Si + 接続法大過去形…条件法Ⅱ<br>(複合形) | 1     |                | 1          |               | 2              |
| Si + 直説法半過去形…条件法Ⅱ          | 1     |                |            |               | 1              |
| 条件法Ⅱ                       | 22    | 11             | 52         | 3             | 88             |
| 条件法Ⅱ(複合形)                  | 4     | 1              | 3          |               | 8              |
| 部分別頻度数の合計                  | 50(2) | 22(2)          | 99(3)      | 3             | 174(7)<br>(総計) |
|                            |       |                | 102        |               |                |
| %                          | 28.8% | 12.6%          | 58.6%      |               | 100%           |

## 3) 図Aと図Bの比較検討

条件法Ⅰの頻度数は104で、条件法Ⅱのは174であり、条件法Ⅱは条件法Ⅰを量的に圧倒している。さらに、条件法Ⅰの場合、全体に対する部分が占める割合は、対話部分64.4%、地の文の部分22.1%であるが、条件法Ⅱではそれぞれ28.8%、58.6%であり、対話部分と地の文の部分の対比が条件法ⅠとⅡで逆転している。これは一般的に条件法の新しい形であるⅠが主として話し言葉に用いられ、古い形のⅡの方は書き言葉に属していたことを示すものであろう。

次に、ⅠとⅡを含めた条件法全体の頻度数は対話部分117、地の文の部分125

ではほぼ同数である。さて、下記の図Cは条件法全体に対してⅠとⅡが占める割合を対話と地の文の部分別に示したものである。

図C：部分別条件法Ⅰ，Ⅱの占める割合

|        | 条件法Ⅰ  | 条件法Ⅱ  |
|--------|-------|-------|
| 対話部分   | 57.3% | 42.7% |
| 地の文の部分 | 18.4% | 81.6% |

地の文を書き言葉の文体，対話文を話し言葉の文体とほぼ考えることができるので，図Cから書き言葉には条件法Ⅰは非常にまれにしか現われないのに，話し言葉では条件法Ⅰが6，Ⅱが4の割合であることが判る。従って，書き言葉では条件法Ⅱが一般的に用いられ，話し言葉では条件法ⅠがⅡより少し多いという状態で両者が共存していると考えられる。さらに，条件法の古い形，Ⅱが現在のプロヴェンス語では消滅している点を考慮すれば，新しい形のⅠが書き言葉より流動的で改新的な話し言葉のなかにすでに広がりつつあったことを示していると考えられることができる。

さて，ここで二つの条件法の価値について考えねばならない。両者の間に価値の違いが存在したのか。つまり，価値の違いによって使い分けがなされていたのだろうか。上記図AとBから「si+直説法半過去形…条件法Ⅰ」の型，「si+接続法半過去形…条件法Ⅱ」の型，並びに条件節のない文中に現われる単純形の条件法ⅠとⅡの三つの型が圧倒的に頻度数が多いことが明らかである。それ故，これらの例を検討し，二つの条件法の特徴を探ることにしよう。

## Ⅱ

### 二つの主要な仮定体系の用法

「si+直説法半過去形…条件法Ⅰ」をa型，「si+接続法半過去形…条件法Ⅱ」

をb型と名づける。図Dはそれぞれの型の総頻度数を100%にして各部分が占める割合を示している。

図D

| 部分  | 対 話   | 地 の 文 |               | 登場人物の<br>独白・考察 |
|-----|-------|-------|---------------|----------------|
|     |       | 作者の視点 | 登場人物<br>の 視 点 |                |
| a 型 | 75%   | 3.1%  | 15.7%         | 6.2%           |
|     |       | 18.8% |               |                |
| b 型 | 23.8% | 65.1% | 0%            | 11.1%          |
|     |       | 65.1% |               |                |

図Dから対話部分と地の文の部分の割合の相互関係がa型とb型で逆転していることが判る。この逆転は非常に顕著であるので、この二つの部分に絞って検討しよう。

まず、Brunot の La pensée et la langue <sup>(8)</sup> を参考にして仮定の実現の可能性の程度により、〈irréelle〉(非現実)と〈possible〉(可能性を有する)という互に対立する二種類の仮定に仮定文を分類しよう。〈irréelle〉な仮定とはある行動または出来事がありえない、非現実だと判断される条件のもとに置かれているものを、〈possible〉な仮定とはある行動または出来事がありうる、可能であると判断される条件のもとに置かれているものをいう。なお当然のことながらこの分類の中には、条件節あるいは主節の動詞に関する行為実現の「時」(過去, 現在, 未来, 超時間)の問題も同時に考慮されねばならない。

〈irréelle〉な仮定については、たとえば、

○条件法の動詞が過去に関係する例

過去／過去 (従節の動詞の時／主節の動詞の時)

(8) F. Brunot, La pensée et la langue, pp. 890-6.

例 1 (b型) Si fos vaus Dieu aisi convers

Con vas Amor e vas si dons,

De paradis fora totz dons.

(v. 4366-8) (対話部分)

(訳: S'il avait eu l'esprit tourné vers Dieu autant qu'envers  
Amour et envers sa Dame, il eût été tout a fait maître du  
paradis.)

現在/過去

例 2 (b型) Car si res i pogues valer

Phebus o degra ben saber,

Que fon meges maravillos

E totz le prumers ques anc fos;

(v. 3045-8) (地の文の部分<sup>(9)</sup>)

(訳: S'il y avait quelque remède efficace, Phébus aurait bien  
dû le savoir, lui qui fut un merveilleux médecin et le premier qui

(9) 例文の分類の基礎は文脈から意味を把握することである。列挙した例の中で判りにくいものに簡単な説明を付け足すと、

例 2: 作者は、愛はどんな薬も効かないほどの激しくつらい痛みだと思っている。

例 3: 作者は 安閑と暮す者は愛の感染を避け難いということわざをギョームに当てはめている。

例 6: ギョームはフラメンカが詩篇集に接吻する時、意中の婦人である彼女に一言《hélas》と囁くことができ、喜びに満たされる。しかし、この例の仮定は v. 3987 が仮定の非実現を明示しているので、〈irréelle〉とみなされる。

例 8: ギョームが意中の婦人を教会の聖歌隊席から人に気づかれぬように小さな穴を通して眺めようとして努力するのを作者が推測するが、v. 2603 の《e ben l'estet》(et il le fut en effet) はその仮定が現実されたことを明示している。

例 9: 作者は招かれた客たちがアルシャンボーが開いた祝宴の食卓に座って食べるよりもフラメンカと話をしたいであろうことを言って、彼女の美しさや魅力がどんな程度かを説明する。v. 535 《Mout s'en levon boca dejuna.》(Beaucoup donc se lèvent à jeun.) はこの仮定の実現を述べている。

ait existé.)

○条件法の動詞が現在に関係する例

過去／現在

例3 (b型) Si fos en un tornei armatz

On agues mil colps pres e datz

Ja, fe que-us dei, tant no-il sovengra

D'amor ni al cor non la tengra,

(v. 1812-5) (地の文の部分)

(訳 : car s'il avait été en armes dans un tournoi, où il eût mille coups à donner et à recevoir, je vous assure, foi que je vous dois, qu'il ne penserait pas autant à l'amour et qu'il ne le retiendrait pas ainsi dans son coeur.)

現在／現在

例4 (a型) Qui aucir ancui mi volía

E-l mieus amix dous si podía

Far aucire per mi guerir,

Avans volría el morir

Ques eu suffris anta ni dan.

(v. 6299-303) (対話部分)

(訳 : Si présentement on voulait me faire mourir, et si mon doux ami pouvait se faire tuer pour me sauver, il préférerait mourir que de me voir souffrir honte ou dommage.)

例5 (b型) Quan la nug adormir si cuja

S'agues los uils totz plens de suja

No-l dissera[n] ja meilz de no.

(v. 4369-71) (地の文の部分)

(訳：La nuit, quand il pense s'endormir, ses yeux ne refuseraient pas plus énergiquement de se fermer, s'il les avait tout pleins de suie:)

○条件法の動詞が未来に関係する例

現在／未来

例6 (b型) Gran joi agra si-l dures gaire,  
Mais aqui eis si desconorta,  
(v. 3986-7) (地の文の部分)

(訳：Son bonheur serait grand, s'il pouvait être durable. Mais tout de suite le voilà qui se désespère.)

○条件法の動詞が超時間に関係する例

超時間／超時間

例7 (b型) E si fos Amors dreituriera  
Tut cor foran d'una maniera,  
Mas so es d'Amor sa dreitura  
Que ja non gart dreit ni mesura.  
(v. 3193-6) (地の文の部分)

(訳：Si Amour était équitable, tous les coeurs seraient faits d'une même manière. Mais l'équité d'Amour, c'est de n'observer ni justice ni mesure.)

<possible> な仮定については、たとえば、

○条件法の動詞が過去に関係する例

過去／過去

例8 (b型) E si pogues los ueils partir

Si que-l pertus gares l'us oilz  
 E l'autre gares sai los foils  
 Ben l'estera e ben l'estet.

(v. 2600-3) (地の文の部分)

(訳: Et s'il pouvait séparer ses regards de façon que d'un oeil il regardât le pertuis, et de l'autre, ici, les feuilletts du livre, il en serait bien heureux, et il le fut en effet.)

○条件法の動詞が現在に関係する例

現在／現在

例9 (b型) Mai[s], si pogues traire a cap  
 Que sol un mot ab lei parles  
 No-il calgra si pois dejunes.

(v. 532-5) (地の文の部分)

(訳: et néanmoins, s'il pouvait arriver à lui dire seulement un mot, il lui importerait peu de jeûner ensuite.)

○条件法の動詞が未来に関係する例

現在／未来

例10 (a型) -«Belle amigueta, si-us plasía,  
 Sol qu'en pues[c]? li demandaría,

(v. 5027-8) (対話部分)

(訳: -«Belle amie, s'il vous semblait bon, je lui demanderais seulement: «Qu'en puis-je?») )

未来／未来

例11 (a型) Mout i faría gran ergueil  
S'ieu d'aizo dizía de no.

## (v. 12-3) (対話部分)

(訳：Je me montrerais, certes, bien orgueilleux, si je lui répondais non.)

○条件法の動詞が超時間に関係する例

超時間／超時間

例12 (a型) E cel que non sap molt volria

Ancar apenre si podia.

(v. 4831-2) (地の文の部分)

(訳：Celui qui ne sait pas grand'chose voudrait apprendre encore, s'il pouvait.)

## 1) a型とb型の比較

仮定を〈irréelle〉と〈possible〉なものに分けることによって、a型とb型がどのように現われているかを見よう。図 E<sub>1</sub>, E<sub>2</sub> は対話部分に、図 F<sub>1</sub>, F<sub>2</sub> は地の文の部分に関する分類表である。

地の文の部分について、図 F<sub>1</sub> はb型がどんな「時」に関係する仮定表現にも用いられることを示している。従って、b型は非常に広範囲な「時」を表現しうることが判る。図 F<sub>2</sub> によると、b型例において〈irréelle〉な仮定が占める割合は78%になっており、b型は全体的印象としては非現実的色彩を濃く持っていると思われる。時制の一致に従って過去未来を表わすa型例は、厳密に言えばa型に属さないとと思われるので、それらを除くと、a型例は3例という極めてまれな出現数である。従って、a型は話し言葉の仮定体系の型であり、書き言葉には例外的に用いられるだけのようである。

次に対話部分の例に移ることにする。a型の24例に対し、b型は15例で、a型がb型より多いが両方の型が共存していると言えるだろう。さらに、a型例とb型例が現われる領域がしばしば重なり合っている。つまり、b型例の15の



○対話部分

図E<sub>1</sub>: a, b型の例における条件法形動詞の頻度数

| 仮定       | 動詞の時 |     | a型 | b型    |
|----------|------|-----|----|-------|
|          | 条件法  | 従属節 |    |       |
| irréelle | 現在   | 現在  | 2  | 2     |
|          | 未来   | 現在  |    | 5     |
| possible | 未来   | 現在  | 6  | 4(1)  |
|          |      | 未来  | 15 | 4     |
|          | 超時間  | 超時間 | 1  |       |
| 総頻度数     |      |     | 24 | 15(1) |

図E<sub>2</sub>: 二種類の仮定が占める割合

| 仮定       | a型    | b型    |
|----------|-------|-------|
| possible | 91.7% | 53.3% |
| irréelle | 8.3%  | 46.7% |

○地の文の部分

図F<sub>1</sub>: a, b型の例における条件法形動詞の頻度数

| 仮定       | 動詞の時 |     | a型     | b型    |
|----------|------|-----|--------|-------|
|          | 条件法  | 従属節 |        |       |
| irréelle | 過去   | 過去  |        | 19(1) |
|          |      | 現在  |        | 1     |
|          | 現在   | 過去  |        | 2     |
|          |      | 現在  | ((1))  | 5     |
|          | 未来   | 現在  |        | 2     |
|          | 超時間  | 超時間 |        | 3     |
| possible | 過去   | 過去  |        | 4(2)  |
|          | 現在   | 現在  |        | 1     |
|          | 未来   | 現在  | 1      | 3     |
|          |      | 未来  | ((1))  | 1     |
| 総頻度数     |      |     | 3((2)) | 41(3) |

図F<sub>2</sub>: b型例において二種類の仮定が占める割合

| 仮定       | b型    |
|----------|-------|
| possible | 22.0% |
| irréelle | 78.0% |

(( )) 記号は登場人物の視点による地の文の頻度数を示す。この数はこの記号のない数に含まれている。時制の一致に従って過去未来を表わす例はこの表には含まれていない。

うち10がa型例と同じ枠内に分類されている。図E<sub>2</sub>によれば、a型例の〈possible〉な仮定の占める割合は91.7%に達する。従って、a型は全体として〈possible〉な印象を与える傾向が強いと思われる。一方、b型はこの場合〈possible〉な仮定の例が53.3%、〈irréelle〉な仮定の例が46.7%になるので、b型はa型よりも非現実的印象を強く与えるのであろう。しかし、地の文の部分のb型の場合と対話の部分のb型とを比べる時、〈irréelle〉な仮定の占める割合はそれぞれ78.0%と46.7%であり、かなりのずれが感じられる。

## 2) 地の文の部分ではa型の出現が稀である原因

作者の視点による地の文の部分のb型例41の全てが三人称形である。三人称形であることから、この41例の条件法形動詞が表わす行動自体に作者の主観は存在しない。作者の視点による地の文の部分のa型例は1例しか見出されない。そこで一般にb型は客観的で〈irréelle〉な性格を、a型は主観的で〈possible〉な性格を持っているということが出来る。

たとえば、

例1 (b型) Car s'il ames e non agues

Ab que s'amor paisser pogues,

Ieu cug ben que pieitz l'en estera.

(v. 1407-9) (作者の視点による地の文の部分)

(訳: Car aimant et n'ayant rien pour nourrir son amour, elle eût, je pense, bien plus souffert.)

例2 (b型) Qui agues tòt Paris e Rems

Adoncs al rei e l'o disses,

Non cuh de la danza mogues

Ni feira semblan fos iratz.

(v. 744-7) (作者の視点による地の文の部分)

(訳：Si l'on avait pris au roi Paris et Reims et qu'on fût venu le lui dire, il n'aurait point, je crois, quitté la danse ni fait la mine d'un homme affligé.)

例3 (a型) Qui d'aicest cujar no-m cresía

Eu non creiría lui fort ben,

Si m'en plevía neis sa fe.

(v. 3904-6) (作者の視点による地の文の部分)

(訳：Et qui ne me croirait pas sur ce point, à mon tour je lui refuserais toute créance, même s'il m'engageait sa foi.)

例4 (a型) E, si-l plazía ques anes

Dreg per Nemurs, et amenes

Flamencha, bon grat l'en sabría,

(v. 371-3) (登場人物の視点による地の文の部分)

(訳：Et s'il lui plaisait de passer droit par Nemours et de lui amener Flamenca, il lui en saurait le meilleur gré,)

例5 (a型) Ara vejas doncs que faría

S'entra mos brasses la tenía

Que la sentis et la baisas

Et a ma guisa la menes!

(v. 4707-10) (対話部分)

(訳：Voyez donc ce que je ferais si je la tenais entre mes bras, si je la touchais, l'embrassais, si je la traitais selon mon désir!)

例6 (a型) E si-us podias neis pensar

Qu'ie-us pogues far majors honors

A mi sería grans dóuzors,

E voluntiera o faría;

(v. 6856-9) (対話部分)

(訳: Et si vous pouviez seulement supposer qu'il me fût possible de vous faire plus d'honneurs encore, ce me serait une grande douceur, et je le ferais bien volontiers.)

例7 (a型) -《Amiga, per que-i pessar[i]am

Si de vos [.j.] bon mot aviam.》

(v. 4569-70) (対話部分)

(訳: Pourquoi y réfléchissons-nous, chère amie, si vous nous en donnez un bon?))

例1は《ieu cug》(v. 1409) (je pense), 例2は《non cuh》(v. 746) (je ne crois pas) をそれぞれの構文の中に挿入しており, 作者が登場人物のことに ついて想像していることを表わしていると思われる。

例3は作者の視点による地の文の部分のa型の唯一の例である。例4はアルシャンボーから国王に送られた伝言の内容を間接的に説明したものである。この例4は登場人物の視点によるa型の2例中の1例で, これらa型例は両方とも例3と同じニュアンスを持っている。つまり例4の動詞《sabria》は三人称単数形であるが, これは間接話法で書かれているからで, 直接話法では一人称となるものである。実質上の主語, 《sabria》の行為する主体は伝言の書き手であるアルシャンボーである。動詞が一人称の主語を持つ時, 多少とも話者あるいは書き手の意志, 主観が動詞の行為実現に含まれると思われる。従って, 例4のa型の場合, 話し手の意志を幾らか含んでいるといえる。例3の《creiria》(v. 3905)も, このテキストの作者である《eu》に結びついた条件法I形一人称単数動詞なので, 主語の意志を多少とも含んでいる。相対的傾向を問題にして, 主観的, 客観的, 意志的, 推測的という見地で見れば, 例3は三人称形の

b型の41例とは少し異なっていると思われる。

a型は主に話し言葉に使われるので、a型を知るためには対話部分の例を検討する必要があるだろう。例(5, 6, 7)は対話部分のa型例である。例5はギヨームが愛の女神に懇願する場合で、一人称単数形動詞《faria》(v. 4707)は主語であり話し手であるギヨームの意志や願望の色彩を幾らか帯びている。例6は、フラメンカがギヨームに語っている場合で、一人称単数形動詞《faria》(v. 6859)は例5と同様に主語であり話し手であるフラメンカの意志や願望の気持ちを多少とも含んでいる。例7は話し手の憤慨の気持ちが含まれている唯一の例だと思われる。a型の頻度数32(図A)のうち、動詞の主語が実質的に一人称で作者または話し手のいろいろな意志的ニュアンスを幾らか含んでいるものは15ある。以上のことから、a型の全体的印象は〈possible〉である上に意志の主観的なもので、b型のそれは〈irréelle〉である上に客観的で推測的なものであることが判るだろう。従って、作者の視点による地の文の部分にa型が例外的にたった1例見られるのは、理由がないことではなく、a型とb型の全体的印象の違いに原因があると思われる。

### 3) 対話部分におけるb型の用法

b型例において〈irréelle〉な仮定が占める割合が地の文の部分の場合と対話部分の場合ではかなりの開きがあることをすでに指摘した。さらに、条件法Ⅱ形動詞の人称についても問題がある。地の文の部分では41例全てが三人称形であるが、対話部分では一人称形が10例、三人称形が5例である。そこで、対話部分におけるb型の用法をさらに詳しく検討してみよう。

まず、図E<sub>1</sub>の「〈irréelle〉, 現在/現在」の分類枠には、a型が2例、b型が2例見られる。このa型の例はすでに13ページの例4に挙げた。b型の例を1つ挙げると、

例 (b型) Que, si fosse el temps antic

Et eu trobes aital amic,  
 Ben cujera Jupiter fos  
 O alcus dels dieus amoros.  
 (v. 5225-8) (対話部分)

(訳：que si nous étions aux temps antiques, et si je trouvais un pareil ami, je croirais avoir affaire à Jupiter ou à quelqu' un des dieux amoureux.)

これは、侍女の一人がフラメンカともう一人の侍女にギョームについて自分の意見を述べるという箇所である。

このa型とb型例はどちらも現在に関する〈irréelle〉な仮定と解釈でき、両者の間にニュアンスの相違は見出されない。このことは、a型がb型の勢力分野の一部である現在に関する〈irréelle〉な仮定表現にまで進出していると考えてよいであろう。なぜなら、a型はその生成期である11世紀頃には未来に関する仮定を表現しうるが、現在に関する仮定については12世紀中頃にならなければ見出されないからである。<sup>(10)</sup>

図 E<sub>1</sub> の3番目の分類枠「〈possible〉, 未来/現在」にはa型が6例、b型が4例見られる。たとえば、

例1 (a型) E per so bainnar mi volría,  
 Seiner, dimercres, si-us plazía;  
 (v. 5681-2) (対話部分)

(訳：Je voudrais donc me baigner mercredi, s'il vous plaisait, <sup>(11)</sup> seigneur;)

(10) A.-J. Henrichsen: Les phrases hypothétiques en ancien occitan, pp. 98-9.

(11) 例1から4までの前後関係は次のようである。

例1：フラメンカはアルシャンポーに入浴はいつも彼女を病氣から回復させたと言

- 例 2 (b型) E volgra ben, s'a vos plagues,  
 Cascus de vostr'a[zaut] saupes;  
 (v. 6421-2) (対話部分)

(訳: Je voudrais bien, s'il vous plaisait, qu'il leur fût donné de connaître votre charme.)

- 例 3 (a型) -《Bell'amigueta, si-us plasia,  
 Sol qu'en pues[c]? li demandaria,  
 (v. 5027-8) (対話部分)

(訳: -《Belle amie, s'il vous semblait bon, je lui demanderais seulement: 《Qu'en puis-je?》)》)

- 例 4 (b型) 《Domna, si tan faire volses  
 Que vostre cor nos mostrasses,  
 Meilz vos en saupram conseiller;  
 (v. 4989-91) (対話部分)

(訳: 《Dame, si vous vouliez tant faire que de nous ouvrir votre coeur, nous vous en saurions mieux conseiller.》)

について、例 1 と例 2、例 3 と例 4 という具合に組み合わせて検討すると、最初の組み合わせには a 型と b 型の違いは明瞭に出ていない。しかし、後者の組み合わせには話者と聞き手の身分関係の相違が明確に表われている。a 型は、例 3 に見られるように女主人から侍女に話すのに用いられる。つまり、身分の上の者が下の者に対して使っているわけである。b 型については例 3 と同じような例がない。従って、b 型は a 型よりもより敬語的であると言えよう。図 E<sub>1</sub>

う。

例 2: ギョームはフラメンカに二人のいとこに会ってくれるように頼む。

例 3: フラメンカは侍女に答える。

例 4: 侍女はフラメンカに助言することを望んでいる。

の分類では、今取り扱った a 型、b 型例は同じ枠内に属しているが、話し手の意識内では区別されている。つまり、例 2 と例 4 の話し手は、b 型が〈irréelle〉な全体的印象をもっていることから、条件節の事項が聞き手によって実現されないだろうという意味合を出し、一段と鄭重さを増しているものと思われる。

図E<sub>1</sub>の2番目の「〈irréelle〉、未来／現在」の枠内には、b 型が 5 例ある。たとえば、

例 (b 型) Feira que savis e nembratz

Si penses de mi desliurar

Ans que plus mi laisses forsar;

(v. 2778-80) (対話部分)

(訳：Je n'agirais qu'en homme sage et prudent si j'envisageais de me libérer avant de m'être laissé forcer davantage.)

これは、愛に苦しんだギョームが愛の女神に話しかけている場面である。

もしこの例に b 型ではなく a 型が用いられていたなら、その仮定は〈possible〉な印象を与えるであろう。つまり、ギョームは自由になることを考えることはありえないことを強調するために、〈irréelle〉な印象を与える傾向が強い b 型を使ったものと思われる。実際、その次の行を見ると、この仮定が〈irréelle〉であることが明確になる。

Mais tart mi sui reconogutz,

Quar abans que sai fos vengutz

M'o degr'aver eu ben penssat;

(v. 2781-3)

(訳：Mais je me rends compte trop tard de mon état. C'est avant de venir ici que j'aurais bien dû avoir cette pensée.)



テキストには条件節が現在に関係し、主節が未来に関係する〈irréelle〉な仮定を表現している a 型の例は 1 つもない。従って、a 型はこの仮定を表現するのには使われず、その役割は b 型が受け持っていたと言えるであろう。

図 E<sub>1</sub> の 4 番目の「〈possible〉, 未来/未来」の枠内には、a 型が 15 例、b 型が 4 例見られる。たとえば、

例 A (b 型) E moutas ves volrai que m'oïna  
 Laïns al foc privadamens,  
 Que non feira se i agues gens.  
 (v. 3544-6) (対話部分)<sup>(12)</sup>

(訳: Il m'arrivera souvent de m'oïndre, ici dedans, tout seul au coin du feu, ce que je ne pourrais faire s'il y avait du monde.)

例 B (a 型) E s'ambedui eron ab ellas  
Aurion ab cui si deportesson,  
 (v. 6434-5) (対話部分)

(訳: Auprès d'elles s'ils étaient tous deux, ils auraient avec qui se distraire.)

において、b 型も a 型も客観的には同じ〈possible〉な仮定を表現しているのであるが、文脈から判断して b 型の場合には話し手が仮定の非実現を予期していると思われる。実際例 A ではギョームは一人になることを是が非でもなし遂げなくてはならない立場に置かれているので、b 型を使って仮定の非実現を予期しているニュアンスを出していると考えられる。例 A と同様に残りの b 型例

(12) 例 A と B の前後関係は次のようである。

例 A: ギョームは地下道を作らせるためにしばらくの間宿の主人夫妻が引越して自分一人だけになることを望んでいる。

例 B: ギョームはフラメンカに自分のいとこ達を彼女の侍女達に紹介したいと言う。

3つについても多かれ少なかれそういう意味合を持っているようである。a型の場合には、例Bに見られるように、仮定の実現も非実現も強調しているとは思われない。このa型とb型のニュアンスの違いについてはすでにA.-J. Henrichsen <sup>(13)</sup>が述べている。

### Ⅲ

#### 条件節のない文中に現われる条件法Ⅰ及びⅡの用法

図Gは対話と登場人物の独白・考察と地の文の区別に例が占める割合を示したものである。

図G：部分別例が占める割合

| 部分   | 対 話   | 登場人物の<br>独白・考察 | 地 の 文 |              |
|------|-------|----------------|-------|--------------|
|      |       |                | 作者の視点 | 登場人物の<br>視 点 |
| 条件法Ⅰ | 64.4% | 13.6%          | 10.2% | 11.8%        |
|      |       |                | 22.0% |              |
| 条件法Ⅱ | 25.0% | 12.5%          | 59.1% | 3.4%         |
|      |       |                | 62.5% |              |

図から見て明らかなように、ここでもまた対話部分と地の文の部分の例が占める割合がⅠとⅡとでは全く逆転している。

まず条件法の様々な用法を具体例で確かめ、地の文、対話の部分のそれぞれについて用法別分類表を作成し、これらの部分で条件法ⅠとⅡがどのように使われているかを検討しよう。

(13) A.-J. Henrichsen, *Les phrases hypothétiques en ancien occitan*, pp. 179-180. 《Lorsqu'on se sert d'un conditionnel I, on ne met l'accent ni sur la réalisation ni sur la non-réalisation de l'hypothèse; lorsqu'on choisit un système avec un conditionnel II, on a en vue la non-réalisation de l'hypothèse.》

たとえば,

- 例1 (条件法Ⅰ) Ja dises ques hui sabrīatz  
 Del mot qu'ieu dis si l'e[n]tendet  
 Cel que l'autrier ab vos parlet.》  
 (v. 4890-2) (対話部分)<sup>(14)</sup>

(訳: Ne disiez-vous pas qu'aujourd'hui vous sauriez s'il a entendu la réponse que je vous ai suggérée, celui qui, l'autre jour, vous a parlé.》)

- 例2 (条件法Ⅱ) Per son vol ganre l[i] costera  
 Que cil postz fos ad una part,  
 Que sos oils de sa dona part,  
 (v. 3150-2) (作者の視点による地の文の部分)

(訳: Il aurait bien volontiers sacrifié beaucoup d'argent pour que la cloison qui séparait la dame de son regard fût déplacée,)

- 例3 (条件法Ⅰ) Aquis pessa que la faría.  
 (v. 3470) (登場人物の視点による地の文の部分)

(14) 例1～11の前後関係は次のようである。

- 例1: 侍女がフラメンカに話す。  
 例2: 作者はギョームが教会でフラメンカを眺めようと努力するのを想像する。  
 例3: ギョームは地下道を作るために適当な場所を探す。  
 例4: アルジャンポーは、国王がフラメンカを本当に愛しているのではないかと疑っている女王に答える。  
 例5: 作者はギョームの下着について考える。  
 例6: ギョームは愛の女神に願う。  
 例7: 侍女のアリスがフラメンカに話す。  
 例8: アルジャンポーは彼を非難する一人の友人に言う。  
 例9: 作者はギョームがフラメンカを愛するために、偽って修道僧になることについて愛の女神に憤慨する。  
 例10: ギョームは神にフラメンカのこと祈る。  
 例11: 夢の中でギョームはフラメンカに彼女自身に会う方法を教えられる。

(訳：c'est là qu'il décida d'ouvrir le chemin.)

- 例 4 (条件法 I) -«No-i movas, domna gelosía,  
Que ja per ren non o sería.»  
(v. 879-80) (対話部分)

(訳：-«Ne mêlez point la jalousie à tout cela, madame, ce serait vraiment sans motif.»)

- 例 5 (条件法 II) Caussas de saia non caussera  
Si ben hom tant non la tirera.  
(v. 2202-3)

(訳：Il n'aurait pas chaussé des chausses en étoffe de laine bien qu'elles n'eussent pas été si longues à mettre.)

- 例 6 (条件法 II) Be-m degraz sol u mot sonar  
Que-m feses alcun bon conort.  
(v. 2059-60) (対話部分)

(訳：Vous devriez bien me dire un mot, au moins, qui m'apporterait quelque réconfort.)

- 例 7 (条件法 I) E cascuna de nos volría  
Avan esser justisiada  
Que vos fosses de ren blasmada.  
(v. 5386-8) (対話部分)

(訳：Et chacune de nous préférerait se laisser justicier que de vous attirer quelque blâme.)

- 例 8 (条件法 I) E que diría de vergonha?  
(v. 1203) (対話部分)

(訳：Et que dirais-je pour couvrir ma honte?)

例9 (条件法Ⅱ) Aï! Amors, Amors! quant saps!

E qui-s pessera que-s tondes

Guillems per tal que dompnejes?

(v. 3810-2) (対話部分)

(訳: Ah! Amour, Amour, que de choses tu sais faire! Qui eût pensé que Guillaume se fût fait tonsurer pour faire la cour à sa dame?)

例10 (条件法Ⅱ) Bel sener Dieus! si ja m'aura

Merce, ni ja s'o pensara,

Cil que-m pogra del tot garir?

(v. 4611-3) (対話部分)

(訳: Beau seigneur Dieu! aura-t-elle jamais pitié de moi, y pensera-t-elle seulement, celle qui pourrait si bien me guérir?)

例11 (条件法Ⅰ) Per aqui mos amix vengues

Els bains a mi, quan la-m sabría.

(v. 2940-1) (対話部分)

(訳: Par ce chemin mon ami viendrait à moi quand il me saurait aux bains.)

について、以下のように C<sub>1</sub> から C<sub>6</sub> までの 6 種類の用法に分類することができる。<sup>(15)</sup>

[C<sub>1</sub>]: 「時」として、過去における未来を示すのに役立つ。

例1の従属体系の中の条件法Ⅰ形動詞《sabríatz》は未来形の間接話法への

(15) W. Meyer-Lübke, Grammaire des langues romanes, t. III, Syntaxe, pp. 300-3, F. Brunot, La pensée et la langue, 3<sup>e</sup> édit., pp. 504-5, 526, 537, 552, 564, 566, 570.

置き換えであり、主文の単純過去形動詞《dises》に時制の一致を行なっているのである。

[C<sub>2</sub>]：「法」として、従属節で表わされていない条件の下に置かれた行動を示す。時として条件は暗黙のうちに理解されるにすぎない。

例2では、条件法Ⅱ形動詞《coftera》は《per son vol》という条件下に置かれた過去に関する非現実な仮定を表現している。例3では、条件法Ⅰ形動詞《faria》は暗黙の条件《si je faisais》のもとに置かれた未来に関する潜在的に実現可能な仮定を表わしている。

[C<sub>3</sub>]：条件下に置かれていない不確定な行動を表現する。

例4では、条件法Ⅰ形動詞《seria》は現在に関する出来事が不確定であるという意味合を出している。例5では、条件法Ⅱ形動詞《caussera》、《tirera》は過去の出来事を作者が推測あるいは想像していることを示している。

[C<sub>4</sub>]：敬意、礼儀正しさを表現する。つまり、条件法が話者の意志や願望を弱めたり、不確定さを表現したりすることによるのである。

例6では、条件法Ⅱ形動詞《degra》が不確定さを表現することで命令表現を弱め、例7では、条件法Ⅰ形動詞《volria》が願望の気持ちを弱めて表現することでそれぞれ敬意を表わしている。

[C<sub>5</sub>]：憤慨の感情を表わし、結果的に反語文のように否定を省略文で表現する。

例8では、条件法Ⅰ形動詞《diria》は現在に関する憤慨を表わす。この文は嫉妬に狂ったアルシャンボーが自分の妻を守るためなら不名誉さえも問題ではないという意味である。

例9では、条件法Ⅱ形動詞《pessera》は過去のことに関する憤慨を表わし、作者は結局誰も考えなかっただろうと言いたいのである。

[C<sub>6</sub>]：言われたことをありそうもない、本当らしくないとみなすのに役立つ

つ。すなわち、《éventualités》に対する疑いの気持ちを表わす。

例10では、条件法Ⅱ形動詞《pogra》は《éventualités》に対する疑いを表わす。つまり、ギョームはフラメンカが彼を直すことができることを信じているが、この実現のためにフラメンカに会って話をする機会を持つことができることを疑っているのである。

例11では、条件法Ⅰ形動詞《sabria》は不確定さを示しており、彼女の恋人が知るであろうことを意味するが、その実現は少し不確定なのである。従って不確定さと《éventualités》に対する疑いの用法は異なる。

### 1) 地の文の部分における用法

この部分では、二つの条件法がどのように用いられているか比較検討しよう。1)で述べた条件法の用法別に資料を整理分類した表は次のようである。

|              |          | 条件法Ⅱ | 条件法Ⅰ  |         |
|--------------|----------|------|-------|---------|
| 非現実な仮定       | 過 去      | 19   |       |         |
|              | 現 在      | 3    |       |         |
|              | 未 来      | 3    |       |         |
| 可能性のある仮定     | 過 去      | 1    |       |         |
|              | 未 来      |      | 3     | ((2))   |
| 不 確 定        | 過 去      | 16   | ((3)) |         |
|              | 現在あるいは未来 | 9    | 2     | ((6))   |
| 不確定さの表現による敬語 |          | 1    |       |         |
| 総 頻 度 数      |          | 52   | ((3)) | 5 ((8)) |

記号(( ))は登場人物の視点による地の文の例の頻度数を表わす。記号のないものは作者の視点による例の頻度数である。

条件法Ⅰ形動詞の総頻度数は13で、全て現在あるいは未来に関するものである。さらに一つとして非現実な仮定を表現するものはない。

一方条件法Ⅱについては、総頻度数55のうち、39例は過去に関するもので、25例が非現実な仮定、1例が可能性のある仮定、28例が不確定を表現している。

従って、条件法ⅡはⅠより非現実的印象が強いと思われる。条件法Ⅰの5例は未来に関する潜在的可能性のある仮定を表現しているが、Ⅱの同じ例は一つもない。頻度数の少ない条件法Ⅰに限ってこの表現に用いられているということは、ⅠとⅡが使い分けられていた証拠だと思われる。そして、そのことは新しい形のⅠがその元来の特徴的用法であるこの表現において、すでに古い形のⅡに取って代わっている状態を示しているのではないだろうか。次に、現在あるいは未来に関する不確定表現の枠内には、両方の条件法の例が見られる。これは、新しいⅠが古いⅡのこの領域にまで進出して来ていることを示していると思われる。

## 2) 対話部分における用法

ここでも地の文の部分と同様の表を作成しよう。

|                                    |                       | 条件法Ⅰ | 条件法Ⅱ |
|------------------------------------|-----------------------|------|------|
| 過去における未来                           |                       | 2    |      |
| 可能性のある仮定                           | 未 来                   | 9    |      |
|                                    | 超 時 間                 | 4    |      |
| 不 確 定                              | 過 去                   |      | 3    |
|                                    | 現在あるいは未来              | 11   |      |
| 《éventualités》に対する疑い<br>(現在あるいは未来) |                       |      | 7    |
| 憤 慨                                | 過 去                   |      | 1    |
|                                    | 現 在                   | 2    |      |
| 敬 語                                | 意志あるいは願望を<br>弱めた表現による | 7    | 2    |
|                                    | 不確定表現による              | 3    | 9    |
| 総 頻 度 数                            |                       | 38   | 22   |



上記の表において、敬語的表現を除けば、二つの条件法が両方とも同じ分類枠内に現われることはない。過去の時を表現する条件法Ⅰのいかなる例も見出されないが、条件法Ⅰの複合形の2例（1例は対話部分で、もう1例は登場人物の独白部分であるが）は過去の時を表わしている。対話部分の1例を挙げると、

Morta sería per mon vol,

(v. 4180) (対話部分)

(訳: je voudrais être morte,)

これはフラメンカが自分の受けている苦しみについて言っているところである。

条件法Ⅰは複合形の2例を除いては過去を表現するのには使われない。

さらに、《éventualités》に対する疑いの表現は行為の非実現を予期する不確定表現とも言えるので、結局のところ地の文の部分で見られた条件法Ⅱの非現実的印象に合致していると思われる。従って、対話部分では勢力の小さい条件法Ⅱは、過去と非現実的印象につながるニュアンスを表現するのにしか用いられていないことが判る。これは、条件法Ⅰが進出して来た結果、Ⅱはその特徴ある用法のみに後退してしまったものと思われる。

さて、条件法が敬語を表現している場合については、条件法Ⅰの頻度数は総数38に対し10、Ⅱは22に対し11で、全体に対する比率はⅡの方が大きい。また、侍女とフラメンカの対話の場面を調べると、Ⅰは侍女もフラメンカも使っているのに対し、Ⅱは侍女からフラメンカに対してだけである。仮定体系の主節に現われる場合なども含め全部のⅡの例を対象にすれば、フラメンカが侍女に対してⅡを使っている例は、Ⅱだけが表現できる過去の表現などを除けば見出すことはできない。これらのことから、条件法Ⅱは敬語としてはⅠよりも一層鄭重な性格を備えていると考えられる。

## IV

以上Ⅰではテキストから抽出された全資料について、Ⅱでは主要な2つの仮定体系の型について、Ⅲでは条件節のない文中に現われる条件法についてそれぞれ比較検討したが、その結果を要約すると次のようになる。

書き言葉には条件法Ⅱのみが通常用いられ、話し言葉にはⅠとⅡが6対4の割合で共用されている。

地の文の部分では、b型は仮定が関係するいろいろな時を幅広く表現する能力を持っており、また、全体として〈irréelle〉で客観的印象を与える。一方、a型は例外的に地の文の部分に現われるだけであるが、しかしその場合の例はb型と異なり、主観的で〈possible〉な意味合を表わす。対話部分では、b型はa型より少数で、〈irréelle〉な仮定あるいはb型の〈irréelle〉な全体的印象に負う特殊なニュアンス、敬語的ニュアンスや仮定の非実現を予期しているニュアンスを含んだ仮定を表現する。a型は全体として〈possible〉な印象を与えるが、〈irréelle〉な仮定を表現する例もわずかながら見られる。

地の文の部分では、条件法Ⅱはその半数の例が〈irréelle〉な仮定を表現しているのに、未来に関する〈possible〉な仮定を表現する例は見出されない。条件法Ⅰはこの部分では非常に少数だが、その中の3例がそれを表現している。対話部分では、ⅡはⅠより少数で、過去の時を表現する時にⅠに代わって用いられる。さらに、条件法Ⅱの〈irréelle〉な全体的印象に由来すると思われる、《éventualités》に対する疑いや条件法Ⅰよりも鄭重な敬語を表現するのに用いられる。

結局、本稿で行なった時と意味による分類方法では、2つの条件法が同じ分類枠内に重なって現われることは数少ないことが判った。そして、同じ分類枠内にあるものでも、敬語の鄭重さの程度などニュアンスに相違があると思われる。

るものもあった。従って、2つの条件法には価値の違いが存在し、ある程度選択して用いられていたと考えられる。第一の違いは、条件法Ⅰは話し言葉に専ら用いられ、書き言葉にはⅡが通常用いられていたということである。第二は条件法Ⅱは全体として〈irréelle〉で客観的印象を、Ⅰは〈possible〉で主観的印象を与えるということである。さらに、Ⅱだけが条件法過去の価値を持ち、そして逆にⅠだけが過去未来を表現するということである。以上のようにして、話し言葉と書き言葉のそれぞれの領域内で2つの条件法が区別されて用いられていると考えられる。

ところで、2つの条件法が時と意味に関して同じ価値を持っている例は少数ながら存在した。これは古い形の条件法Ⅱの領域に新しい形のⅠがすでに徐々に進出しつつある状態を示していると思われる。

### テキスト

- Lavaud et Nelli: Les Troubadours (Desclée de Brower, 1960)  
 Paul Meyer: Le Roman de Flamenca, 1<sup>ère</sup>édit. et 2<sup>e</sup>édit.

### 参考書目

- J. Anglade: Grammaire de l'ancien provençal (Paris, 1921), Histoire sommaire de la littérature méridionale au moyen âge (Genève, Slatkine Reprints 1973)  
 E. Bourciez: Eléments de linguistique romane, 4<sup>e</sup>édit. (Paris, 1956)  
 F. Brunot: La pensée et la langue, 3<sup>e</sup>édit. (Paris, 1953)  
 A.-J. Henrichsen: Les phrases hypothétiques en ancien occitan (Bergen, 1955)  
 H. Lafont: Grammaire occitane.  
 G. Millardet: Le roman de Flamenca (Paris, 1934)  
 W. Meyer-Lübke: Grammaire des langues romanes, traduite par A. et G. Doutrépoint, t. III, Syntaxe (Paris, 1900)  
 E. Brunot, G. Bruneau: Précis de grammaire historique de la langue française (Masson et Cité, 1969)  
 P. Ménard: Syntaxe de l'ancien français (Sobodi, Bordeaux 1973)  
 G. Moignet: Grammaire de l'ancien français (Paris, 1973)